

体験談：就学

内容：学校見学から入学まで

< 概要 >

私の子どもは、'知的障害を伴う自閉症'の障害を負っています。そして、今年めでたく、地元の小学校に入学しました。現在は、「情緒障害児学級」に元気に通っています。

子どもが小学校に入学する際、親は非常に複雑な気持ちに駆られると思います。「不安」「期待」「寂しさ」などそれはその親にしか分からない気持ちでしょうし、どうしても「不安」が先行する人が多いかもしれません。ただ、見方を変えれば色々な気持ちにふけることが出来たり、体験したり出来るのは「子をもつ親の特権です」。せっかくの特権なので、「子どもに最も適切な環境を提供できるように」と、学校選びを楽しんでほしいと思います。

ここでは、我が家の体験記を時期を追って紹介することで 皆さんのこれからの '楽しい学校選び' の参考になれば幸いです。(途中、話が横道にそれますが、お付き合いくださると嬉しいです)

1) まずは就学の流れを把握する。(4月~6月頃)

幼稚園では年長さんになりました。年長での生活が落ち着くと同時に、「そろそろ就学のこと考えねば！」と言うことで、妻と話し合い。

「どういうスケジュールで進めるのか?」「具体的にどこの学校が選べるのか?」

そんな感じでしたので、色々と調べてみました。また、我が家の場合は 入学とほぼ同時に引越しの計画が重なり、更にややこしそう・・・でも、「せっかく学校を選ぶのだから、楽しんで選ぼうよ!」と言うことで、はじまり、はじまり。

まずは就学までの流れを調べようと思っていた時に、療育センターから「就学相談会」の案内が来ました。そこで、大よその '就学手続きの流れ' と '就学の基本ルール' についての説明を受けました。但し、この種の相談会では学区の特徴や詳細な情報は入手できません。尚、手順や内容・時期は、地域によって多少の差があるようです。

また、自分の住んでいる地域で通える(選べる)学校を把握することも必要です。学校の選択肢としては、「小学校の普通学級」「小学校の特殊学級」「養護学校」の3種類になります。相談会で説明がない場合は、療育センターや、市町村の教育委員会に問い合わせれば教えてもらえます。我が家の場合は、引越し先が療育センターの管轄外ということで、教育委員会に後日確認しました。

ただ、学区の小学校に「特殊学級」が無い場合があります。その場合は、新たに学級を設置してもらわないといけないのですが、最低2名以上の対象児童が必要です。

学校側(教育委員会?)によっては、2名以上の対象児童がいても設置を拒む場合もあるようです。地域の学区内に特殊学級がない場合、近隣(学区外)の特殊学級に通うケースもあります。その場合、双方の小学校の了解を得る必要があるようです。

<ポイント>

就学までのスケジュールを把握しましょう。

自分の住んでいる地域内で通える（選べる）学校を把握しましょう。

越境通学については、親の負担も考慮して慎重に考えましょう。

（無理な越境を選択した結果、通学自体が子どもだけでなく、親にも負担となっているケースがあります。6年間という比較的長い時期を過ごすわけですから、慎重に考えてください。もちろん、途中で学校を変えることは可能です。）

2) 学校見学（訪問） 就学相談（7月～9月頃）

最初に簡単な説明です。見学については、個人で学校に連絡をして、学校見学を申し込むことが多いようです。また、地域によっては市町村教育委員会からこの時期に就学相談の案内が来ます。

我が家の場合、引越し予定地域の「養護学校」と「小学校」に直接TELで、申し込みをしました。

さて、体験談です。学校選びでは「学校見学の結果」が大きな判断指標になると思い、この部分の体験談は詳細にしました。

まずは、妻と「子どもの6年間の教育」をどのように進めたいのかを話し合いました。

我が家の場合、幼稚園での成果が大きかったので、特殊教育とは別に、健常児との交流教育にも魅力を感じていました。

ただ、今思うと幼児教育での「良い先生」は共通して、未発達な子どもの本質をよく理解しているので、自閉症児や健常児に関係なく、「導く」のが上手い。小・中学校の先生は子ども達の認知能力がある程度高いことに甘えて、自分の方針を押し付ける傾向がある（と思う）。（もちろん良い先生も沢山います。ただ、時としてそういう傾向が伺えます）さて、話を戻します。

そして、欲張りな私たちは「特殊教育も充実し、できれば健常児との交流も密に出来るところ！」と当たり前の結論をだしました。ただ、小学校は夏休み前の学校行事で忙しいとのことでしたので、まずは養護学校の見学を申し込みました。

(養護学校の見学体験記)

養護学校の見学はすんなりOKをもらい、自閉症児の割合を聞くと、「全体の5割くらいですね」との回答、「これだけ自閉症児の割合が多ければ、TEACCHの実践現場を見ることができるかも？」と期待して養護学校の見学に妻と子どもと一緒に3人で出かけました。

行ってみると、「すごく広い！」多くの養護学校は小・中・高の学部があるため、それなりに大きいのですが、そんなことすら知らない私たちは、まずその大きさに驚きました。

そして、TELで話をした主任の先生に案内されて、一年生から順番に六年生までを見学することに。まずは低学年(1～2年生)のクラス、教室はと言うと、特に場所の構造化(仕切り壁等)は見当たらず、個別のスケジュールボードもありません。黒板に、一時間目から最後までまでの課題(科目)が大きな字で書かれて

いました。主任の先生に、「個別のスケジュールボードとかはないのですか？」と聞くと「そういうのはないですねえ」との回答・・・・・・・・・・。

低学年のクラス構成は「児童 20 人、先生 5~6 人」くらいだったと思います。皆で輪になって、簡単な言葉あそびをしているクラスと、プール(教室横に簡易プールを設置)で水あそびをしているクラスがありました。その時です、ちょっと目を離れたスキにポコちゃん(我が子のニックネームです)がなんと！パンツ一枚になっているではありませんか！例に漏れず、水あそびが大・大・だーい好きなポコちゃんは、勝手に服を脱いでプールに入る気満々！です。ちょっと可愛そうでしたが、「プールには入りません」と伝えて、ちょっと強引に見学続行です。

次に 3~4 年生のクラスを見学です。3・4 年生のクラスは少し人数が小規模でした、このあたりはよく覚えていないのですが、もしかしたら、能力別にクラスを細分化していたのかもしれない。個人的には、構造化を行う場合、教室にはある程度のスペースが必要なので、一クラスに 10 人くらいが理想なのかな？と思っています。ですから、私的には理想的。

ここでも、教室等の構造化は目に見える形ではありませんでした。(もともと、学校という空間が比較的構造化されているので、子ども達は ある程度順応すると思うのですが、やはり欲張りな私は TEACCH モデルに出てくるような学校を期待してしまいます)

4 年生の授業は国語でした。課題はなんと、自閉症児が苦手な「て・に・は・を」の正しい使い方です。例えば、「今日()良い天気なの()、外でボール遊び()しました」の()を、適切な文字カードで埋めると言うものでした。順番に同じ文にチャレンジするようですが、ちょうど自閉症の子どもの順番でした。

すると、その児童は適当に()に文字カードを張りました。当然、不正解です。その時でした、担任の先生が「前の人のを見てた？前の人のを見てたらできるはずでしょ！」と注意したのです。

私は、「これは取り組み自体がまずいのでは？」と思いました。仮に前の人の興味をもって見ていたとしましょう。しかし、自閉症児の場合は比較的、'丸暗記'が得意な子がいます。「て・に・は・を」の文法を理解していなくても、「A」のカードは 1 番目、「B」のカードは 2 番目というように覚えて、見かけ上は正答にたどり着く可能性があります。先生の「前の人のを見ていたら出来るはず」というのは、正にその通りなのですが、少し取り組みに難ありかな？と感じました。しかし、こう言った取り組み上のミスは、養護学校のみでなく、小学校の特殊学級でも実際にあることだと思います。やはり親と学校が知恵を出し合って、出来る限りミスを犯さないように協力できる環境が必要ですね。

(私は常にスモールステップの課題提示が重要だと考えています。)

次に、5・6 年生の高学年のクラスを見学しました。床に大きな紙を広げて大きな絵を描いていました。目印となる下書きが少しだけ描かれていたように覚えています。皆、楽しそうに絵を描いていたのが印象的でした。学校が子どもにとって楽しい所というのは非常に大切な要素だと思います。

一通りの見学が終了し主任先生から、養護学校の理念や年間スケジュール等の説明を受けました。その説明の中の話の流れで、私が「自閉症児は情緒に障害があるわけではないですからね」と言ったところ、「そんなことは、ないですよ」との返答。その後の話で、その主任先生は肢体不自由児の養護学校から赴任したばかりと知り、「こりゃ、しょうがないかな？」と言う気持ちもありましたが、養護学校の主任という立場なので、もう少し勉強してほしいとも感じました。(きっと、今はそんなことはないと思いますが)

そして、見学を終了し、お礼の挨拶をして私たちは帰路につきました。帰ってから、妻とお互い思ったことを話し合いました。養護学校ですから、全般としては妥当な教育を受けられると思います。ただ、私が勝手に予想していた「TEACCH モデルのような」工夫はこの養護学校には不足していた感があったことと、見学途中に児童が叱られている場面を見かけたのですが、それが少し疑問に感じる対応であった為、まずは「保留」という意見で一致しました。

後日、同時期に別の養護学校を見学した知人の話を聞いたのですが、その学校ではそれぞれの児童に個別の目標が設定されていたと言うことで、大変その人は関心していました。養護学校でも、意外とそれぞれの学校での取り組みの差が大きいのだなぁと思いました。

就学対象の養護学校の見学が私たちにとっては、少し期待を裏切る結果となってしまったので、(私の期待し過ぎもまずかったですと思いますが) 就学に関しては少し消極的になっていました。ただ、幼稚園の行事が盛りだくさんで、毎回ハラハラ、ドキドキではありますが 先生方のフォローもあり、楽しい幼稚園生活を送っていたのが 私たちのその時の支えであったように思います。

(小学校の見学体験記)

さて、気を取り直して小学校の見学です。

引越し先の学区のA小学校は調べておいたので、そのA小学校にTELで連絡をしました。既に夏休みに入っていたので、授業風景は見れませんが先生方と直接話をして、現在の取り組みや特殊教育に対する学校の考え方を確認できればOKです。そもそも受け入れてもらえるのか? という不安もありましたから。ちなみに、学校内の見学&話し合いには これまたすんなりと了解を貰いました。

その小学校には知的障害児学級が既にあり、3名の児童(自閉症ではない)が在籍していました。まず最初に教室を見せてもらいました。教室にはトランポリン、大きい三輪車、レゴブロック、等等 遊具が満載です。そして、なにやら沢山の工作が飾ってあります。それもかなり高度! 「これは? 」と質問すると「全部、教頭や学年主任の先生達が子ども達に作ったものですよ」との答え、「へえ〜」と関心してみたいたら、なんと本棚には私の愛読書のひとつ 「光とともに」の1・2巻があるではありませんか! でも、3・4巻は?? 教頭先生が「色々あるでしょ」と嬉しそうに言いましたが、「私の方こそちょっと嬉しい! 」ってなもんです。

その後、応接室で色々話しをしました。まず、'自閉症についての説明' や '自閉症児と関わる上でのポイント' など、失礼とは思いながらも自作した資料を基に私から一通り説明。また、ポコちゃんの発達状況や今までの生育歴についても資料にまとめて持参したので、それらも説明しました。予想はしていましたが、自閉症に関する専門的な知識はあまりないようでした。(あの'光とともに'は何だったの? ちょっとトーンダウンです・・・) しかし、IEPの必要性については、「どんな子どもにも必要だと思ってます! 」とか「自閉症児を無理に個室で能力検査するなんていうのは犯罪に等しいと聞いたことはあります」など、「うん、うん、」と、つい私もうなずいてしまう言葉もチラホラ。とにかく、私の目を見て話をしっかりと聞いてくれている先生方の姿勢に誠意を感じました。

但し、自閉症児は情緒障害児学級になるケースが多いのですが、「クラスを興すには最低二人以上必要」との

こと。そして勿論、教育委員会の承認が必要！ 実は、もう一人自閉症児が入学する可能性もあるとの情報を貰い、「しばらく待ってほしい」と言われました。また、この小学校では‘親学級’の仕組みは取っておらず、「交流」という名目で体育などの科目は普通学級の子どもたちと一緒に受けるということでした。

帰り際、「学区の就学相談があるので是非行って見て下さい」と言われ、引っ越してもいないのに、後日引越し予定先の学区の就学相談に行くことになりました。

尚、養護学校、小学校ともに（特に小学校）子どもの身辺自立について先生方は興味があるように感じました。参考までに、この時期のポコちゃんの主な身辺自立状況を下記に示します。

排泄：大・小ともに一人で出来る。但し、オシッコの時はお尻丸出し。お尻拭きはいい加減。

衣服の着脱：一人で出来る。但し、シャツをズボンに入れるのは苦手。ベルトは通せない。

食事：偏食はけっこう激しいが、パン・白米・牛乳は好き。箸はエンピツ持ち。

（不思議と箸で納豆くらいは挟めるが、難しいものは手づかみもしてしまう）

（就学相談体験記）

この時期の‘就学相談’では、「具体的な就学先を親の要望等も聞きながら相談して方向付ける」ことが目的となります。就学相談員は2名でした。二人とも町内の小学校で特殊学級を担任している先生です。（A小学校とは別の学校の先生） 私たちは、希望として「見学をしたA小学校への入学」と「できれば情緒障害児学級の設置」を伝えました。

私は‘情緒障害児学級’の名称には問題ありと考えていますが、自閉症児に対する適切な教育プログラムを組むためにも 中身として‘自閉症児学級’の設置が出来ればベストと思い、2つの希望を伝えました。

すると、年配の方のベテラン先生が「A小学校への入学は大丈夫です！仮に裁判をしたって学校側は負けるんだからね」「あと、新しい学級の設置もおそらく大丈夫ですよ」とのこと。とにかく、確定ではありませんが先生の力強い言葉になんとなく‘ホッ’としました。その先生が言うには、「普通学級への入学を希望されると難しい」とのことでした。

日本では、基本的に何らかの障害をもつ子どもが普通学級に入学することは公的には認められていません。

しかし、現実に障害を持ちながら元気に普通学級に通っているお子さんはいます。いずれにしても、

子どもにとって出来る限り最適の環境を与えることを目的に、学校を選んで欲しいと思います。

また、私たちの場合は引越しがあるので‘就学時健康診断’をどこで受けるのか？についても相談しました。すると、「どうせ引っ越してみえるなら、こっちの学校で受けたら？」「あと、就学健康診断に親が付き添うのは構いません」「私の方から町の教育委員会には連絡しときますので大丈夫です」と、またまた、ありがたい言葉。

実は事前に市の教育委員会に聞いた時は、就学健康診断時に住んでいる学区（B小学校）で受けるように言われていたので意外でした。

その後も、相談員の先生方の学校での取り組み等 色々とお話を聞きました。そしてなにより、身近に‘良き理解者’がいることの心強さを改めて実感しました。（そのベテラン先生には今でも色々とお話を聞いています）

<ポイント>

小学校に限らず、養護学校でも各学校の取り組みには差があるため、必ず学校見学には行きましょう。先生の子ども達への接し方をよく観察しましょう。(言葉かけ、褒め方、叱り方に工夫はあるか?) 学校見学、就学相談の時には、「子どもの発達状況、生育暦、お願いしたいこと、聞きたいこと」等を、あらかじめ資料にまとめて、持って行きましょう。この時期には親としての「希望の学校」をしっかりと決めておく必要があるでしょう。

あと私が思う、養護学校と特殊学級の大まかな良い点と悪い点は以下の通りです。断わっておきますが、あくまで個人的な思いですし、全ての学校がこういう傾向にあるわけではありません。

養護学校

良い点：教育プログラムがある程度 確立しているため、比較的安定した特殊教育を受けられる。

悪い点：模倣の対象(手本)となる子どもが少ない。健常児と接する機会が少ない。 但し、地域の小学校との交流活動などにより、それらを補っている養護学校も多いです。

小学校の特殊学級

良い点：同じ地域の子ども達と接する機会が多い。生徒数が少ない場合、先生との連携を密に取れる。

悪い点：学級の取り組み=障担の取り組み となるので、先生次第の要素が非常に大きい。(不安定)

特殊学級では特に、先生との協力関係を上手に築いて行くことが、かなり重要だと思います。そういう意味では、親の責任が大きいかもしれません。

3) 就学時健康診断 (10月頃)

最初に説明です。市町村教育委員会より、就学児健康診断の案内が送られてきます。

場所は学区内の小学校で行われます。内容としては、簡単な健康診断と知能検査です。基本的には、子どもは別室で診断を受けるため、親は様子を見ることは出来ませんが、事前に学校にお願いすれば、親同伴で受けることができることもあります。

(診断医師に自閉症の正しい知識があるとは限らないので、同伴を希望したいと思う親も多いかと思います。) また、原則としては、その時住んでいる学区の小学校で受けるようです。 私たちの場合は、前述の通り、引越し予定先のA小学校で親同伴で受けることになりました。

就学相談も終わり、しばらくすると引越し予定先の教育委員会から「就学時健康診断」の案内が送られてきました。尚、就学相談の時にベテラン先生から言われたこともあり、その時住んでいた学区内のB小学校には、「就学時健康診断をA小学校で受けること」など、一通りの予定を連絡しておきました。

就学時健康診断も3人で出かけました。ちなみに平日に行われます。ポコちゃんの誘導は妻の方が上手いので、母親が付き添いをする事になりました。 視力検査、知能検査などは予想通り上手くいかなかったようですが、パニック等もなく、無事に終了しました。 私はというと、入学前の簡単な説明を他の児童のお母さん方と一緒に聞いていました。

ただ、その教育委員会の方針のようなのですが、就学時健康診断の知能検査で問題が見つかった場合は勿

論のこと、事前に障害を伝えた場合でも、別の日にもう一度、簡単な知能検査を受けるのが通例のようで、少し面倒な気はしましたが、それについても受けました。

それと、しばらくしてから、その時住んでいた所の市の教育委員会からも就学時健康診断の案内が送られてきたので、B小学校にTELをしたのですが、「行き違いだったかもしれませんね、捨てちゃってください」とのこと。言われた通り、捨てたのですが、一ヶ月経ってから今度は市役所から「就学時健康診断を受けてください」と通達がきました。A小学校で受けたことを説明するだけで、特にトラブルはありませんでしたが、教育委員会や学校等の横のつながりが結構いい加減なことに戸惑いました。(これも地域差はあると思います)

もう一つ、参考として知人の例を挙げます。その方は子どもの就学先として養護学校を希望して入学しました。その場合も就学時健康診断は地元の小学校で受けるのが原則なのですが、その子も付き添いなしは困難と親が判断し、学校側に付き添いを要望したのですが、その小学校ではそれを拒否しました。そこで、その方は専門医の発達検査と健康診断の報告書を小学校に提出して就学時健康診断は受けませんでした。

<ポイント>

子どもの発達状況・特性によっては付き添いなしでの診断が困難な場合もあります。

上記以外にも色々なケース・方法があると思いますので、まずは希望を伝えて、そして一人では悩まず、周囲の人達に相談してみましょう。良い考えを見つけてくれる人が必ずいるものです。

4) 就学通知が送られてくる (12月~1月頃)

やるべきことは、既に一通り終わっています。あとは就学通知を待つのみです。

いよいよ、教育委員会から就学通知が送られてきます。我が家の場合、希望をA小学校に伝え、A小学校から町の教育委員会にそのことが伝えられてはいましたが、やはり、通知が来るまでは安心できません。

就学通知が送られてきた時は、まるで受験の合格発表を見る感覚でした。少しドキドキしながら確認すると、希望通りの内容でした。(結局、二名の自閉症児が入学することで、情緒障害児学級を新設することになりました)

内容確認後は、納得できる就学先であれば署名して返信します。万が一、納得できない場合は、引き続き、就学相談や調停を行い、決めることとなります。

あとは、入学式を迎えるのみなのですが、出来れば入学を前提に、良い環境での学校生活をスタートするためにも、今度は具体的な取り組み内容や準備等について学校側や実際の担任と話をしたいと思う方も見えるかもしれません。しかし、先生の人事は3月末まで明らかにされませんので、担任との具体的な詰めはできないのです。

ですから、あくまでも'学校側と親'というスタンスでしか話は出来ません。私たちの場合は学級を新設したこともあり、新しく赴任してきた障坦の先生と初めてお会いしたのは、入学式の2日前でした。これでは、具体的な準備をするには時間がありません。なんとかならないものかと思えます。

それでも、入学前に学校側と、出来る範囲で具体的な取り組みを話しておくとしはスムーズなスタート

を切れるかもしれませんが、学校とのコミュニケーションは大切だと思います。私たちは、この時期に「教室での勉強と遊びのスペース分離」を提案し、教室にアコーディオンカーテンでの仕切りを追加してもらいました。

教材については、養護学校で使っているものを流用したり、周辺の特級学級の先生達が協力して自作したりする、ということなので、この時点で細かい要望は出ませんでした。(障担も決まっていませんし・・・)

ちょっと補足です。教材は養護学校と同等のものを使うと言っても、教育の中身が同じとは限りません。道具(教材)を生かすも殺すも、使う側(先生)次第だと思います。

5) めでたく入学式を迎えます。(4月)

さあ、晴れて「ピカピカの一年生」で、入学式を迎えます。
しかし残念なことに、私は入学式を直接見ていません。実は3月から2ヶ月間、海外(アメリカ)出張に行っていたためです。上司には「ポコちゃんの卒園式も入学式もあるから、ぜったいにダメ!」と言ったのですが、抵抗むなしく国外退去となりました。卒園後の引越しも妻にまかせっきりとなり、肝心の時には役に立たない情けない父親です。でも、妻から入学式の写真をeメールで送ってもらった時には、思わずうれし泣きしちゃいましたね。

これで、就学に関する体験談を終わります。最後まで読んで頂いた方、ご清聴ありがとうございました。

子どもの入学を心からよろこび、期待いっぱい学校生活をスタートするためにも、この就学準備の期間を積極的に活用して、是非、学校選びを楽しいものにして下さい。だって、これは「子を持つ親の特権」なのですから。